

《新任教員の紹介》

新任教員の紹介

准教授 藤井 崇

4月1日付で京都大学大学院文学研究科に着任しました。西洋史学専修に所属し、ギリシア・ローマ史を中心とする西洋古代史の研究・教育を担当します。みなさま、なにとぞよろしく願い申し上げます。

わたしが京都大学にはじめて在籍したのは文学部に入学した1997年ですが、この年は京都（帝国）大学が設立されて100周年にあたりました。そして、学部を卒業したのは、21世紀はじめの年、2001年です。ですので、わたしが学部、そして大学院で過ごした時代は、冷戦終結とバブル崩壊はすでに久しく、ユーゴ紛争と阪神・淡路大震災の記憶はまだ新しい、アメリカの同時多発テロ事件はまさに同時代で、彼方には東日本大震災が近づいてきているという、そうした時代です。この時代は、国内的には長い停滞の時代が実感されるようになってきた時代とってよいかと思いますが（世代としては一応就職氷河期の一員です）、西洋史研究室は少なくとも院生にとっては大いに栄えておりまして、多数在籍した院生と賑やかな毎日を送りました。COEなどの大きな研究プロジェクトが実施され、研究の国際化が推進されはじめました。2000年代前半にEUが隆盛を迎えたことも、わたしたちの学問に活気を与えたように思います。身近な先輩方のヨーロッパ各国への留学が一般的になってきたのもこの時代で、わたしもこれに刺激を受けて、2004年度のケンブリッジ大学での研究滞在を皮切りに、都合8年間、ハイデルベルク大学（2010年にここで博士学位を取得しました）、チューリヒ大学、オクスフォード大学で研究活動をおこないました。当時のわたしは西洋史学の「グローバル化」の熱心な信奉者でしたし、多少軟弱になったとはいえ、現在でもこの頃に形成された考え方の根幹は変わっていないように自覚しています。2013年度から2年間、京都大学白眉センターで特任助教を務めたのち、2015年度から6年間、関西学院大学に勤務しました。

目下取り組んでいる研究テーマはいくつかありますが、大きくは、ヘレニズム期（前4世紀おわりから前1世紀おわり）とローマ帝政前期（前1世紀おわりから3世紀頃）のギリシア語圏の政治史、宗教史、社会史、そしてこの時代に作られたギリシア語碑文に関心を持っています。2013年に出版した博士論文（*Imperial Cult and Imperial Representation in Roman Cyprus*）では、地中海東部のキプロス島におけるローマ皇帝崇拝のメカニズムを、地域と帝国という視点から考察しました。ここから派生して、現在はこの時代のギリシア人の過去と記憶、死のあり方、感情などにも興味を持っています。京都大学での教育を通じて、こうした研究をさらに深化させることを楽しみにしています。

西洋史学はいかにあるべきか、という向こう見ずな議論をするつもりはありませんが、京

都大学に着任した現時点で漠然と考えていることの備忘録として、二つ記すことをお許しください。一つは、研究の「グローバル化」の行方です。新型コロナウイルスのパンデミックと先鋭化しつつある米中対立のため、今後の見通しは必ずしも明るくはありませんが、モノとアイデアを交換するために移動・交流するという人間の性質が大きく変わるようには思えません。同時に、機械翻訳が完成へと向かった時、西洋史研究者が選択していく道筋にも大いに関心を持っています。二つ目として、これよりももっと身近なテーマですが、西洋史学（とわたしの専門と関連の深い西洋古典学）の「味方」を大学内外に増やしていくことの必要性を痛感しています。さまざまな政治信条、経済的立場、文化的背景、性的指向・性自認を持つ広範な人々の人生に、多少なりとも必要とされる、意義のある西洋史研究は何か。学生とともに考えていきたいと思えます。